

2. 事業の概要と成果	
(1) 上位目標の達成度	ア カンボジア地雷処理センター (CMA C) に技術を移転して、自立処理能力の向上に寄与 CMA C に対し、機械と人力による統合処理、ランドリリース及びマネージメントについて所要の地雷処理技術を移転し、自立能力の向上に寄与した。 イ 地域住民に対する安全性の増大に寄与 処理跡地において地雷事故は発生しておらず、地域住民の安全確保に寄与した。なお、8月3日事業地近傍のチサン村において対戦車地雷の触雷事故が発生し、住民1名が死亡したが、当団体の処理跡地ではなかった。
(2) 事業内容	ア 技術移転 統合地雷処理能力の向上、ランドリリース能力の向上及びマネージメント能力の向上を重点的に技術移転した。 (ア) OJT a 現場指導 処理作業効率、工程管理、処理の品質管理、作業管理、補給整備管理、安全管理及びブリーフィング要領等の教育を合計64回実施した。 別紙第1「OJT実施状況」 b 計画教育 機械と人力の統合処理、GPS使用法、問題解決技法等の教育を合計8回、168名に実施した。 別紙第2「計画教育実施状況」 (イ) 集合訓練 (ITTT) 各DU内のTSO、小隊長、班長等に対し、CMA C 訓練センターにおいて指揮官用地雷処理ハンドブックの徹底、マネージメント能力の教育を2回実施するとともに、IMC処理現場において統合処理に関する野外実習を実施した。被教育者数は、50名/回で、合計100名に実施 参考資料「2013年度ITTT成果報告」 (ウ) CMA C と合同の巡回評価 CMA C と合同の巡回評価を1月にDU1・2・6の各小隊を評価した。 参考資料「2013年度ITTT成果報告」 別冊「2013年度JMAS・CMA C 合同評価成果報告」 イ 地雷処理 ランドリリース方式に基づき、機械処理と人力処理の統合処理により301.3haの地雷原を処理した。(申請書は286haだがCMA A 追加要請に基づき目標が291haとなった) 別紙第3「2013年度 処理地雷原」

(3) 達成された成果	本事業期では、3 ヶ年の最終年度として機械力と人力の統合処理、ランドリリリース方式及びマネージメント技能を主要施策に定めて重点的に技術移転を行った。 ア 技術移転 (ア) 裨益者 事業編成内小隊長等 16 名、事業編成内・外の小隊長等 350 名 合計 366 名であった。(DU2 内の BC チーム、DM チーム、CMAC の全人力小隊数の総計は 350 名) (イ) 素養試験及び練度評価 事業内小隊が対象の素養試験において年度当初は、平均 85.5 点であったが年度終了時には 88 点となり全員目標に到達した。 別紙第 4 「素養試験結果集計表」 また、各個人練度評価目標の 80% に対し、全員の平均点は、80.4% であり、概ね目標に到達した。 * 対象者 16 名中 9 名は、80% 以上の練度を保持 別紙第 5 「各個人毎の能力向上伸び率」 別紙第 6 「各個人練度評価表」 (ウ) OJT a 機械処理と人力処理の統合処理 主な管理者の内、第 102 小隊長は機械作業の限界を見極める判断力と作業優先順位の決定力、それに応じたデマイナー班増援等の対策策定については、更なる教育が必要である。 「各個人練度評価表」を参照 b ランドリリリース ランドリリリースについての基本的な知識・技能が不足していた 3 名に対しても重点的に教育し概ね、全員が習得した。 「各個人練度評価表」を参照 c マネージメント 全般的には、専門家の継続的な現場指導等により、マネージメント意識は向上した。 (a) 安全管理 各隊員の安全管理意識が高くなり、各級指揮官の現場における安全指導により、事故は皆無であった。 (b) 品質管理 今年度処理した全ての地雷原において CMAA 及び CMAC の QA・QC チームの点検を受け、1 件の指摘・指導事項も無く全て合格した。 (c) 工程管理 各級指揮官の工程管理能力は、昨年度に比べ向上したが未だ個人差が大きい。 また、処理作業における機械力(草刈り機を含む)の効率的使用による作業効率を追求するための知識及び意識改革を引き続き、図っていく必要がある。
--------------------	---

	「各個人練度評価表」を参照 (エ) I T T T CMAC DU 1～6内の小隊長等、100名に対し指揮官用地雷処理ハンドブックの徹底、マネージメントの能力及び機械と人力による統合処理に関する事項を教育して、特に、次の能力の向上を修めた。 a ハンドブックの内容について教育し、知識の向上を図るとともに、教育終了後の試験により、全員が80点以上の成績を修めた。 「2013年度 I T T T 成果報告」を参照 b マネージメント能力 主として、安全管理及び工程管理について具体例を挙げて教育し、知識の向上を図った。 「2013年度 I T T T 成果報告」を参照 c 機械と人力による統合処理 IMCのDM処理現場で、DMの性能・諸元、処理要領と特性、デマイナー班との連携要領について目と耳で確認させ知識の向上を図った。 「2013年度 I T T T 成果報告」を参照 (オ) CMACとJMAS合同の巡回評価 各DU小隊長等、134名に対しランドリリース理解度、地雷処理管理要領及びブリーフィング要領を評価した。 「2013年度JMAS・CMAC合同評価成果報告」を参照 イ 地雷処理 今年度の目標291haに対し、301.3haを処理した。約10ha増加したのは、当初計画されていなかったSVC道路建設用地を処理したためである。 また、今年度合計でAT6個、AP76個、UXO172発金属破片336,595個を処理した。 ウ 危険回避教育(参考) 事業近傍地の小学校、行政機関等を主対象に教育を合計35回実施した。(合計被教育者:1,516名) 事業の終始を通じて実施した危険回避教育は、地元密着型教育として広報効果を含め、極めて重要であると考ええる。 別紙第7「危険回避教育実施状況」 エ 広報(参考) JMAS事業を訪れた日本国内居住者、カンボジア居住者等合計68名の見学者に対応した。 マスメディアは共同通信マニラ支局取材(世界情勢により掲載延期)、ディスカバリーチャンネル取材を(日本放映日 2014年3月4日 アジア各国:3月17日(月))受けた。 また、在カンボジア日本国大使館後援を受け、アルビレックス新潟プノンペンFCとコマツ小学生のサッカーイベントを開催
--	---

	した。 別紙第 8「見学者一覧表」
(4) 持続発展性	ア OJT、ITTT 訓練等を通じて JMAS 内小隊に対する技術移転は確実に進展したが、JMAS 外の CMAC 小隊に対しては限定的であり、依然として技術レベルの格差は大きい。 このことは、JMAS の技術移転が予定通り進展していることを示すとともに、常時作業現場において技術指導を行う専門家の有用性を示している。 3 カ年の実績から、JMAS は、CMAC 小隊に対する技術移転を実施できる自信を得た。 この技術移転を通じて CMAC 自ら、技術力を高め作業能力を発揮することが可能となる。 イ 今年度から JMAS 内小隊のサーベイチームで NTS（聞き取り調査）が実施できるよう錬成したため、処理運用能力が飛躍的に向上した。 今後、地雷処理小隊がマルチ能力を保有するよう CMAC 全組織に波及することが期待できる。 参考資料「JMAS 小隊編成の特性」 ウ DM 及び BC チームを各小隊の編成下に入れ、各小隊長の指揮で機械処理を実施しているのは CMAC 内においては JMAS 内小隊だけである。 今後、JMAS は、この機械と人力による統合地雷処理のための編成及び運用について前項のランドリリースを含め、CMAC 他小隊に普及していくことを重視していきたい。 「JMAS 小隊編成の特性」を参照